

効率的な分散投資のポートフォリオにレバレッジかけ 株式よりも低いリスクで高いリターンを目指す設計に

商品開発部長の有賀潤一郎氏が語る

日興アセットマネジメントの人気ファンド「グローバル3倍3分法ファンド(1年決算型/隔月分配型)」が設定来3年を経過した。8月31日現在、設定来騰落率は60.54%の上昇と、これまで高いパフォーマンスを獲得している。また、過去1年でも29.30%の上昇に達している。一方で、基準価額の上昇に伴う利益確定売りなどが一巡している。同ファンドの基本的な特徴や魅力、運用実績などについて、同ファンドの商品開発者であり、同社商品開発部長の有賀潤一郎氏が語った。



3周年、設定来騰落率は60.54% の上昇と高パフォーマンス

■ファンドの現状

当ファンドは、分散型のレバレッジ・バランスファンドという新しいタイプの投資信託として2018年10月4日にスタートした。基準価額が値上がりしたこともあって利食い売りの投資家も少なくないが、1年決算型、隔月分配型の2コース合計の運用資産残高は9月末時点で約3300億円となっている。お客さまから引き続き高い評価を集めていると考えている。

基準価額は、構成している資産より高い水準まで値上がりしている。分散してレバレッジを3倍にかけていることでリスクを過大にとることなく、長期的なリターンとして高い位置にたどり着いているといえる。この間、コロナ・ショック時は基準価額の厳しい下げの局面もあったが、現在は回復して、1万6000円超(8月末時点)と高値を更新した。

■基本的な仕組み

構成する資産は、現物が海外先進国株式、海外新興国株式、日本REIT(不動産投信)、海外先進国REITが各20%、合計80%、残り20%相当の現金を余らせ、その一部を証拠金に日本株式20%と債券200%(日本国債、米国国債、ドイツ国債、イギリス国債、豪州国債各40%)を手当てしてポートフォリオを構築する。

資産にはリスクがあって、リターンがある。例えば、株式と債券の2資産で考えた場合、分散投資をするとリスクが下がってリスク・リターンの効率が良くなる。当ファンドの場合、効率的に分散されたポートフォリオにレバレッジをかけて、株式よりも低いリスクで高いリターンを目指した設計となっている。

18年10月4日の設定日から最近までの当ファンドと各資産のリスク・リターンが実際どうだったのかを示すと、構成する株式(日本、先進国、新興国)、REIT(日本、先進国)のいずれよりも低いリスクで高いリターンになっている。当ファンドの低いリスクで高いリターンということは効率が良いということである。資産を分散させたことに加えて、資産で説明した通り、レバレッジをかけている効果でもある。

■運用の方法

この資産は株とREITと債券からなる。3倍する前の割合は株式20対REIT13.3%対債券66.7%となる。3倍後で説明すると、日本株式、海外先進国株式、海外新興国株式、日本REIT、海外先進国REITが各20%で、株式・REITは合計100%となる。日本株のところだけ現物を買わず先物を利用することにより、ここ

で余ったお金を証拠金に使うなどして、債券(日本国債、米国国債、ドイツ国債、イギリス国債、豪州国債各40%)を買い付ける。国内外債券の合計は200%となるため、株式・REITと国内外債券の合計は300%になる。「40%、60%、200%」という形で数字の大きさは違うが、あえて数字の大きさを違えることでリスクの大きさが3資産同じ程度になる。そのことで値動きが打ち消し合う効果が期待できるため、リスク・パリティという呼び方で当ファンドを説明している。

■ファンドのパフォーマンス

当ファンドは、分散投資のポートフォリオにレバレッジをかけるという商品とあって、値動きができるだけマイルドになりながらより高いリターンに行き着くことを目指して設計したものである。確率的には長い期間投資していただくと、構成する資産群よりかなり高い水準まで上昇することを目指している。8月末までの状況は、東証株価指数(TOPIX)は足を引っ張っていないが、貢献度合いとしては小さかった。しかし、9月になってほかの資産に対して好調であり、好調でないほかの資産と補い合い、かつレバレッジがかかっていることで足し上げ合うという形で運用されている。債券も金利上昇(価格は下落)局面をこなしながら、設定来で、世界国債指数(ヘッジあり)はプラスの貢献をしている。